

## 講演 【朝禱の恵み】

### ● 聖書 マルコの福音書 1章35節

イエスは、朝早く、まだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた。

高山右近についてですが、高山右近さんは、12年間、高槻の城主・高槻城主でした。21歳～33歳までの12年間です。この間(かん)に、キリシタン大名として、キリスト信仰に基づいた生き方、そして、町づくりをすすめてこられました。

宣教師の報告によりますと、天正9年(1581年)、あの「本能寺の変」が起こったのが1582年ですから、その1年前の天正9年(1581年)、2万5千人の領民の内、1万8千人がキリシタンであったと、記録されています。

2万5千人のうちの1万8千人、72%になります。10人中、7人がキリシタンだったということです。

現在の日本の状況でいいますと、日本の人口・1億3千万人の内の1%にもならないキリスト教人口です。0.5%だとも言われています。

72%と、一方、1%にもならない0.5%。一体どこがちがうんでしょうか？

3つのキーポイント、キーワードがあると思いますが、

①つめのことは、「祈りと、それに答える形でなされていった聖霊のみわざ」ということです。

②つめは、次々に人々が救われていきます。しかし、司祭の数はわずかです。そのような中で進められていった「信徒を中心とした教会形成」ということです。

そして③つめのことは、キリスト教の中心・本質である「愛の実践」です。

当時の言葉では、「愛」ということばは別の意味で使われていましたし、キリスト教・聖書でいう「愛」とは全然違うものでしたから、宣教師たちは、別の日本語に翻訳しました。

今でいう「愛」は、「ご大切」ということばに訳しました。そして、「愛する」という動詞は、「大切に思う」ということばに訳しました。

③つめのキーポイント、キーワードは、この「ご大切 / 大切に思うことの実践」ということです。

1つ ・「祈りと、それに答える形でなされていった聖霊のみわざ」

2つ ・「信徒を中心とした教会形成」

3つ ・「ご大切 / 大切に思うことの実践・愛の実践」

この3つのことが、右近さんの頃・キリシタン時代の72%と、現代の1%未満・0.5%の違いである、といえるのではないかと思います。

今朝は、1つめのこと、「祈りと、それに答える形でなされていったご聖霊のみわざ」ということについて、考えてみたいと思います。

先ほど聖書をお読みいただきましたが、私たちの主イエス・キリストご自身、「朝禱会」のメンバーであられたといえますよネ。

「イエスは、朝早く、まだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた。」

早天の祈り・朝禱をささげておられました。

高山右近さんは、どうだったのでしょうか。

実は、高山右近さんも、朝禱会のメンバーだったんですよ。しかも、熱心で、忠実な、朝禱会のメンバーでしたよ。

ルイス・フロイスという宣教師が、「日本史」という本の中で、次のように書き記しています。  
「通常、雨・雪・寒さ・暑さを問わず、教会に最初に姿を見せるのは、きまって、ダリオとその息子たち(右近のお父さんのダリオ飛騨守と、右近さんたち)であり、それは、主日・祝日も平日も同じことであった。」 そのように記されています。

それでは、400年前の、朝禱・朝の祈りがささげられている、高槻城内にあった教会に、皆さんを案内させていただきます。

朝早く、カラン、カラン、カラン…… 鐘が鳴り渡ります。

その鐘の音を合図にして、クリスチャン達が次々と、教会堂に集まってきます。

雨の日も、風の日も、寒く、雪が降っている日でも、まっさきに、一番に教会堂にやってくるのは、だれだったでしょうか？ それは、高槻城主・高山右近ジュストと、右近のお父さんの、高山飛騨守ダリオの親子だったのです。

彼らが床の上にひざまずいて、声高らかに、「主の祈り・パテルノステル」を祈っている声が聞こえてきます。その当時の言葉のまま、祈ってみることにしましょう。

皆さんも、400年前のクリスチャンになったつもりで、当時の言葉で、主の祈り(パテルノステル)を、祈ってみてくださればと思います。ご一緒にお祈りしましょう。

#### 主の祈り(パテルノステル)

天にまします われらが 御(おん)親。  
御名(みな)を たっとまれたまへ。  
御代(みよ) きたりたまへ。  
天において、おぼしめすまなるとく、  
地においても、あらせたまへ。  
われらが日々(にちにち)の御やしないを、  
今日(こんにち)、われらにあたえたまへ。  
われら、人にゆるし申すごとく、  
われらがとがを、ゆるしたまへ。  
われらを、テンタサン(誘惑)に、  
はなし玉ふ事なかれ。  
われらを凶悪より、のがしたまへ。 アーメン

400年前のクリスチャン達も、勿論、「主の祈り」を、このように祈っておりました。

右近さんが、高槻城主になられましたのは、天正元年(1573年)のことですが、その翌年の天正2年に、高槻城内に教会堂が新築されました。

そして、その3年後の1577年・天正5年には、1年間に約4千名の人が洗礼を受けました。

このあと、年ごとにクリスチャンの数は増えつづけていって、

その2年後の天正7年には、高槻領内のクリスチャンの数は4千人から、2倍の8千人になりました。

その翌年の天正8年には、6千人増えて1万4千人になりました。

4千人・8千人・1万4千人と、年ごとに増えていって、天正9年には、前の年より更に4千人増えて、1万8千人。領民の人口2万5千人のうち、1万8千人、72%。10人のうち7人以上がクリスチャンになっていった、キリストの弟子に加えられていったというのです。

まさに、新約聖書「使徒行伝」・「使徒の働き」に記されています記述そのままの姿ですよネ。

「使徒行伝」の時代、初代教会の頃は、「使徒行伝」が「聖霊行伝」と言われるほどで、聖霊が生き生きと働かれています。聖霊によるみわざが力強くなされ、毎日、人々が救われていき、3千人・5千人と、日ごとに、クリスチャンの数が、どんどん増えていったのです。

毎日、人々が救われていきました。家族単位で救われていきました。そして、バプテスマ・洗礼を受けていきました。すべて、聖霊なる神の働きです。

高山右近さんが、高槻城主だった、今から430年ほど前の高槻でも、聖霊による大いなるわざ、聖書の記述そのままの、リバイバルのわざがなされていったのです。

毎日、人々が救われていきました。家族単位で救われていきました。そしてバプテスマを受けていきました。すべて、聖霊なる神の働きです。

領内には、20ほどの教会がありました。

教会が新築されたという記録は、高槻城内にあった教会だけです。残りの19ほどの教会は、もと、お寺や神社だった所です。

かつては、お寺や神社だった建物です。それまで神や仏を信じていた人たちが、今ではデウス・天地の造り主である主なる神さまを信じる者となっていきましたので、もはや、お寺や神社ではありえません。

彼らが集まるそれらの場所は、クリスチャンの集まる場所・教会になっていったのです。

茨木市の「忍頂寺」というお寺のことは、ご存じでしょうか。そのお寺について、次のように記されています。

「右近の領内の摂津の国に〈Ninjoji〉という甚だ有名な寺院があったが、今は当地方に在る最も良き聖堂の一つである。」 そのように記されています。

不用になった仏像などは、処分されていったと思いますが、建物は貴重ですので、聖堂として、教会として使われていきました。

このようにして、どんどんクリスチャンが増えていって、バプテスマを受け、信徒を中心とした教会が建て上げられていったわけですが、ちょっと気になることがあります。それは、1574年・天正2年に高槻教会が新築された後、次のクリスチャンの数に関する記録が3年後になっている、ということです。

3年後、1577年・天正5年には、1年間に約4千名の人々が洗礼を受けていったというわけです。

この間(かん)の3年間は、どういう3年間だったのでしょうか。

3年後にいきなり、4千人が救われたというわけではないでしょうが、大事なはずの洗礼・バプテスマの記録は、2百名の集団洗礼のことが記されている程度です。

クリスチャン大名・高山右近領で、大いなる聖霊なる神によるわざが、すすめられていったわけですが、でも、決して、すぐにではなかったのです。

高山右近が高槻城主となって、すぐではありませんでした。

そして、その翌年に、高槻教会が新築されて、すぐでもなかったのです。

3年間という期間が必要でした。その3年間に右近さん達がしていたことは、何だったのでしょうか。

そうですね！ “祈り”です。早天の祈り・朝禱です。

実は、「朝禱」だけではありませんでした。「夕禱」・夕べの祈りも、熱心に、忠実にささげられておりました。

もう一度、先に引用した文章を思い起こしてみましよう。

「通常、雨・雪・寒さ・暑さを問わず、教会に最初に姿を見せるのは、きまって、ダリオとその息子たちであり、(高山ダリオ飛驒守と、高槻城主・高山ジュスト右近たち、クリスチャンの人たちだったのです。)そして、それは、主日・祝日も平日も同じことであつた。」

彼らは、早朝、教会堂に来ますと、ひざまずいて大きな声で、パアテルノステル(主の祈り)を5回、くり返して祈りました。つづいて「天使祝詞」・アバマリヤの祈りを祈りました。更に、各人が、それぞれの祈りを続けて祈っていきました。

来る朝ごとに、いつものように、祈りの家に共につどいて、主への薫香・祈り、当時のことばでいえば「オラショ」を、主なる神・デウスに、ささげ続けていったのです。

「使徒行伝」・「使徒の働き」の2章の最後、46節・47節のみことばを思い起こしておきたいと思います。次のように記されています。

「毎日、心一つにして宮に集まり、家々でパンを裂き、喜びとまごころをもって食事をともにし、神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。

主も、毎日、救われる人々を仲間に加えてくださった。」

主も、毎日、救われる人々を仲間に加えてくださった。

毎日の、毎朝・毎夕の、へりくだった、忠実な祈り、朝禱・夕禱に答える形で、ご聖霊が働かれ、みわざをなされていったのです。聖霊なる神によるリバイバルのわざが、なされていったのです。

そして、救われ、生まれ変わったキリシタン達は、聖書から教えられた通りのみことばの実践・「ご大切の実践」「ご大切に思うことの実践」を、Simpleに(単純に)・Straightに(まっすぐに)・Spiritualに(霊的に)〈3S〉、すすめていったのです。

それが、結果として、「領民の人口2万5千人のうち、1万8千人、72%がキリシタンであった」という、祝福された姿になっていったのです。

イエス様も、朝早く、まだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられました。

朝禱の、よき手本を、私たちに示してくださいました。

私たちも、「キリストに倣いて」〈イミタチオ・クリスティ〉、「キリストに倣う者」とされて、そのことによって、祝福をいただく者とならせていただきたいと思います。

私たちに内住してくださっている、聖霊なる神さま。私たち一人一人を、更に、祈りのために整え、あなたの大いなるみわざを、私から、私たちの家族から、私たちの教会から始めてください。

アーメン